

本研究の目的は、ドミニカ共和国（以下、ドミニカ）からアメリカに渡る野球選手（「野球移民」）の存在に注目し、彼らの移住経験をとおして浮かびあがるドミニカの人びとの生活世界を、「野球移民」と送り出し社会の人びとの相互交渉に着目して明らかにすることである。1990年代以降、欧米のプロ・スポーツ界を中心にアフリカ、中南米出身の外国人選手の活躍が目立つようになった。この「スポーツ移民」とよばれる人びとが誕生する背景には、急速に拡大するグローバル化の影響があり、プロ・スポーツ界も安価な人材を発展途上国に求めはじめたからである。しかしながら、これまで、彼らを送りだす社会の側に軸足をおいて、「スポーツ移民」の発生要因を出身社会の文化との関わりから検討されることはなかった。従来の研究では、「スポーツ移民」が誕生する社会の人びとの生活世界を詳細に検討することなく、経済的指標によって移民送り出し社会を貧困と設定することで、豊かな「北」と貧しい「南」という二分法の枠組みのなかで発生要因を説明することに終始する傾向があった。

ドミニカ野球の研究においても、プロ・スポーツのグローバル化を世界経済システムの文脈に位置づけ、「中核（アメリカ）」による「周辺（ドミニカ）」の経済と文化の包摂であるという分析がなされてきた。また、近代スポーツをめぐる人類学的研究は、外来のスポーツが当該社会に根づく過程に注目し、それを土着化という用語で一面的に分析するのが主流であった。しかし、いずれの研究も「スポーツ移民」と彼らを送りだす社会の人びととの、伝統的な規範や価値観にもとづく相互交渉については注目してこなかった。こうした問題意識にもとづき、本論文では以下の課題を設定した。ひとつめは、「野球移民」の移住要因を現在の世界経済の諸相に着目して明らかにすること。もうひとつは、野球という近代スポーツとドミニカ社会の親和性に着目し、「野球移民」の発生要因を明らかにすることである。

ドミニカからアメリカに渡る「野球移民」が急増しはじめるのは、1990年代を過ぎてからである。それは、メジャーリーグベースボール（MLB）の各球団がこぞってドミニカに選手発掘・養成施設であるアカデミーを設けるようになった時期と重なる。アカデミーを頂点とした選手のリクルート・システムの整備は、効率的なリクルートを可能にしたが、これは、世界の中核から周辺地域に製造拠点を移してきた製造業の多国籍化と見事に一致する形態である。

その一方で、ドミニカが1965年以降、多くの移民をアメリカに送りだしてきた社会であることも「野球移民」が誕生する要因としてあげられる。初期の移民の多くは、都市部の中間階級が占めていたが、1980年代のドミニカ経済の後退を受け、移民の絶対数が増えるとともに、移民となる人びとの階層や背景は多様化しはじめる。ドミニカに特有の大家族のネットワークが、アメリカに到着したばかりの移民を庇護し、連鎖的に多くの移民を生みだすことに繋がったからである。本論文では、アメリカで暮らす移民が増加し、出身地の人びとの日常生活のなかに移民との関係や送金といったこれまでになかったものが入り込むことで、移民を送りだすバリオ（地域共同体）がアメリカという「中核」に結びつけられていく過程を明らかにした。

本論文では、「野球移民」が発生する要因を考察するにあたり、その前提としてドミニカにおいて、野球がいかにカネを稼ぐ手段として認識されているかに注目した。そこでは、移民からの送金によってなんとか生きのびようとする人びとの生活戦略やバリオ内に格差が拡大することを回避するような力学が働いていることが明らかになった。その力学とは、基本的にはカネの稼ぎかたをめぐる規範意識にもとづいているが、その規範から外れた者は「妬み」の対象となる。具体的には、ドラッグを売ったカネ、泥棒で手に入れたカネな

どは「きたないカネ」とされる一方で、ペロータ（野球）で稼いだカネは「きれいなカネ」として認識されている。

一方、バリオ内には、こうした稼ぎかたをめぐる規範にくわえ、①富の独占を許さない、②たかりは恥である、というふたつの規範が存在する。これらすべての規範から逸脱せずに、より多くの送金を受けとろうとする人びとは、移民を「ドミニカンヨルク（ドミニカン+ニューヨークの造語）」としてステレオタイプにあてはめ、「非日常」という条件のもとで、堂々と「たかってもよい」という規範からの逸脱を許す社会的合意が、バリオ内で暗黙裡に共有されることになった。一方の移民も、「ドミニカンヨルク」に込められている理想像や価値観を内面化して育てているために、国際電話などのやりとりのなかで、その役割を演じるようになり、一時帰国の際には、華美で散財のかぎりを尽くす「ドミニカンヨルク」としてのイメージを裏切らない行動をとっていることが明らかになった。

このような移民とバリオの人びとの相互交渉を規定しているのは、バリオ中にはりめぐらされたクーニャ（パトロネージ）とよばれる垂直的な扶養義務システムのネットワークである。バリオの人びとは、ドミニカに特有の母親中心的な大家族を起点としたクーニャにもとづいて送金を引きだし、一方の移民もクーニャにもとづき送金をしている。さらに「野球移民」とバリオの人びとのあいだの相互交渉に注目すると、「野球移民」がクーニャにもとづき、大家族やバリオの人びとを庇護している実態とともに、ペロータで稼いだ「きれいなカネ」が、「気前よく」わけあたえられることで、「野球移民」に威信が付与されることが明らかになった。つまり、バリオの稼ぎかたをめぐる規範に合致し、地域社会全体を救済できるような職業は、「野球移民」しかみあたらないのだった。

一方、当事者である「野球移民」も、カネを稼ぐ手段としてペロータを認識しているが、それを促したのは、システムとして確立されていたアカデミーであり、そこへ選手を送りこむことを生業とするブスコン（仲介人）の存在だった。また、「野球移民」がバリオ全体に富を分配する際、宗教行事にあわせるかたちでなされている事例からは、「野球移民」がペロータに出会い、大リーガーになれたのはすべて「神の思し召し」だという認識をもっていること、そしてバリオの人びととその恩寵を分かちあおうとしていることが明らかとなった。つまり、「野球移民」は、神の名を借りてバリオ全体に恩返しをする必要があったのである。

こうした議論を裏づけることになったのは、アメリカの移民コミュニティの実態だった。多くのドミニカ移民は、出身地の価値観を移住先にもちこみ生活しているが、それが皮肉にも一時帰国を遠ざけることにつながっている。そして、一時帰国できない彼らが、出身地のバリオに重ねあわせていたのは、ドミニカ本国において文化として根づくようになったペロータだった。このようにペロータをめぐる価値観は移民とともに越境し、移住先においても根づく移民の生きかたを支配し、移住先の生活でも揺らぐことはなく、むしろ強化され、出身地のバリオの代わりという新たな意味づけまで付与されていたのである。

以上みてきたように、「野球移民」の移住経験をとおして浮かびあがってきたドミニカの人びとの生活世界とは、①アカデミーや「ドミニカンヨルク」との相互交渉にみられるトランスナショナルな世界経済とのつながり、②クーニャに裏打ちされたバリオの規範意識や価値観、③バリオの価値観に規定される個人の生き様である。こうした異なる三つのレベルが相互に関係し、重層的に重なりあうことで、人びとの生活世界が形成されているのだといえよう。